常葉大学外国語学部紀要〈論文〉
第40号　　2024.3.　　1頁～　12頁

韓国におけるフェミニズムの最前線と新しい運動主体

柳　采　延

The Strategy of the New Generation in
South Korea's Feminist Movement

RYOO Cheyon

2023 年 10 月 17 日受理

抄　　録

本研究は韓国における草の根フェミニズム運動の系譜と展開を分析することで、韓国の第 4 波フェミニズムの主要な運動の戦略がどのような文脈と政治性を持っているかについて明らかにする試みである。デジタルネイティブ世代によって主導された韓国の第 4 波フェミニズム運動は、オンライン上のミラーリング運動から始まり、オフラインの市民運動へと拡大した。「脱コルセット」や「4 非」などに見られるように、自身の身体や生を通じてフェミニズムを実践するという「私的領域の政治化」が活発に行われるところに、その特徴がある。前の世代のフェミニズム運動が多様性や差異の政治を本格的に提起していたのに対し、新しいフェミニズムは男性優位な権力構造に基づく「女性共通」の問題に再び焦点を当てる。本稿では、新しい運動主体の持つ社会的背景への把握を通じて、そうした特徴が形成された文脈を分析し、その上で運動を巡る主要な争点について再検討しよう。

キーワード：デジタルネイティブ世代、ネットフェミ、ミラーリング運動、
脱コルセット、4 B

1．はじめに

2010 年代以降、オンラインメディアを通じて問題意識を発信し共有する世代によるフェミニズム運動が、世界的かつ同時代的に広がった。セクシュアルハラスメントや性暴力被害を Twitter などで告発する運動として広がった「#MeToo」は、その典型例である。SNS 利用の急拡大により、個人レベルで直接発信することができ、短期間で情報を拡散できる環境は、さまざまなハッシュタグ運動を通じた性暴力の告発や日常的なセクシズム（性差別）に関する議論など、フェミニズム的な議論の活発化

をもたらした。このようなフェミニズム運動の新たな潮流は、「第 4 波フェミニズム」と位置づけられている。

女性の財産権や参政権獲得運動（第 1 波フェミニズム）以降の過去の第 2 波フェミニズム（1960 ～ 1970 年代）と第 3 波フェミニズム（1990 年代～）において提起されてきた問題の多くは、いまだ解決されていない。そうした問題は、現在の新しいフェミニズム運動の議論に受け継がれながら、また各社会の文脈と絡み合って展開されている。

デジタルネイティブ世代を中心に広がり、10 ～ 20 代が運動の主体となっている韓国の第 4 波フェミニズム運動は、2015 年前後に「フェミニズム・リブート現象（フェミニズム運動の再起動）」（손희정 2017）と呼ばれるフェミニズムの大衆化の転機を迎えた。

韓国の若年層によるフェミニズムの大衆化は、第 4 波が初めてではない。1990 年代に浮上したヤング・フェミニスト（young feminist）たちによって主導された第 3 波においても、フェミニズムは「常識化」「大衆化」したものとされていた。そういったことから、韓国ではフェミニズム停滞期にしばしば「あのヤング・フェミニストたちはどこに消えたのか」という疑問が投げかけられてきた。

第 4 波フェミニズムの運動主体である若年層女性たちは、オンライン中心の運動を展開させ、フェミニズムの大衆化をもたらしたという点や「急進的」な存在であるとみなされているといった点から、「第 1 世代ネットフェミ」と称されるヤング・フェミニストとの類似性が注目されがちである。だが、結論から言うと、両者が置かれていた社会的背景やスタンスの違いは顕著である。最も大きな違いは、韓国の第 4 波フェミニズム運動については、差異の政治や交差性（intersectionality）よりも、「女性」という「共通」のアイデンティティに基づいた問題に再び重点を置くようになったところにある。韓国の女性運動における旧世代と現在の若年層の間に見られる「断絶」は、どのように生まれたのだろうか。新しいフェミニズムの運動主体はどのような特徴と背景を持っているのか。

本稿ではフェミニズム運動の系譜を辿り、その展開を分析する。そして、韓国における第 4 波フェミニズムの主要な運動の戦略が、どのような文脈と政治性を持っているかについて明らかにしたい。

2．民主化運動以後のヤング・フェミニストの登場と「失われた時代」

⑴　民主化運動とフェミニズム

韓国は植民地支配 (1910 ～ 1945 年) からの解放後、南北分断と朝鮮戦争を経て、1960 ～ 1980 年代まで軍事独裁政権を経験してきた。韓国の女性運動の歴史を振り返ると、1950 ～ 1970 年代までには女性「運動」という言葉はほとんど使用されておらず、「女性勢集合」「女性の地位向上」「女権向上」といった言葉で女性団体の活動をあら

わしていた（오김숙이 2010:111）。当時の社会運動は「反政権運動」とみなされ、弾圧されやすい状況にあった。そのため、女性団体が「運動」として可視化することは不可能だったのである。

1980 年代になると、民主化運動の流れとともに女性運動団体が次々と誕生した。女性平友会 (1983 年)、女性ホットライン (1983 年)、もう一つの文化 (1984 年)、基督女民会 (1986 年)、韓国女性団体連合（1987 年）などがあげられる。この時期の女性運動は民主化運動との関係において、民族民主運動の一つとして女性運動を位置づける勢力と、女性問題の独自性を強調する勢力という二つの流れがあり、後者は 1990 年代の女性運動を主導する。しかし、全体的に 1980 年代は労働者中心の女性運動がまだ支配的であり、「女性労働者」以外の人々や新しい女性像 ── 中産階級、専業主婦、高齢女性など ── は、当時の韓国のフェミニズム運動におけるアイデンティティの政治学を脅かすものとして、進歩的女性運動団体が規定する「女性」アイデンティティから排除されなければならなかった（조주현 1996:146）。

一方、民主化以降の 1990 年代には、進歩陣営内部の家父長制や男性中心性・性差別に対する本格的な問題提起がなされ、「女性」を「女性全般」と規定し、女性運動団体間の連帯も強まっていった。この時期は、ジェンダー平等政策の法制化が急速に推し進められた。その中心には、1987 年に設立された韓国女性団体連合（以下、「女連」）があった。女連は民主化を目指す進歩陣営内の女性団体の連合体として設立され、1990 年代の女性運動を主導したと評価される。性暴力問題の解決や女性関連法の立法運動などを主導し、女性団体の政治勢力化 (女性運動家の政界進出) を導いたのである。

⑵　第 1 世代ネットフェミと差異の政治

同時に、1990 年代にはインターネットの普及や女性の高学歴化と相まって、大学生を中心に「ヤング・フェミニスト (young feminist)」たちが登場した。1980 年代まで大学内の女性運動は学生運動の一つとして扱われてきたが、1990 年代中盤を起点にして、女子学生たちは自分たちの運動が「フェミニズム運動」であることを明示的に掲げ、フェミニストとしてのアイデンティティを明確にあらわした。彼女たちは、大学や大学院でフェミニズムに接したという特徴を持っているものの、活動の場として大学という枠組みはそれほど重要ではなく、主要な活動空間はオンラインであった。

1990 年代中盤以降は、女性間の多様性と「差異」に対する議論が進む。その中心的な役割を担ったのが、ヤング・フェミニストだった。まず彼女たちは、女性と女性運動を眺める新しい観点を提示した。女性／ジェンダー問題を階級闘争や民主化運動の付随的な問題として扱ってきた既存の社会運動や当時の主流の女性運動を批判する。そして、主婦や労働者以外の女性たちにも光を当て、「女性」カテゴリーを再考するというように、フェミニズムの問題意識の範囲を拡張させた。また既存の韓国のフェミニズム運動が労働運動を中心に展開されてきたのに対し、ヤング・フェミニストたちの扱うものには、日常的な性の政治 ── 親密な関係における不平等、家族規範

や家族イデオロギー、性的自由の問題、ネット空間における性差別・セクハラ問題など ── に加え、様々なマイノリティの問題が含まれていた（정연보 2015）。

「ヤング・フェミニスト」という名称は、既成世代から与えられたものであり、「ヤング（young）」には彼女たちを「未熟」なものとして他者化する視点が内包されていた。したがって、ヤング•フェミニストたちの提起した問題意識も他者化されたり、単なる世代的問題として矮小化されたりする傾向にあった。そうした背景から、彼女たちは自らマイノリティとしてのアイデンティティを持ちながら、性的少数者や障害のある女性、移住女性、非正規職の女性など、多様なマイノリティ女性の問題と連帯し、それらの存在を可視化するマイノリティの政治を実践した。つまり「マイノリティと連帯する女性主義運動」というアイデンティティを持ち、自らを既存の女性運動とは差別化していた（오김숙이 2010；정연보 2015）。彼女たちは、当時の主流の女性運動による様々なジェンダー平等政策の制度化や女性運動家たちの政治勢力化の流れとは別の流れとして、2000 年代初期まで若年層中心のフェミニズム運動を主導したのである。

1990 年代末になるとパソコン通信時代が終わり、超高速インターネットの普及により、ヤング・フェミニストたちは、ウェブマガジンの制作、ネット上の女性コミュニティの活動、ネット新聞の創刊などに力を入れた。当時は軍服務加算点制の廃止（1999 年）を背景に、フェミニズム運動へのバックラッシュが強まり、女性団体や女性コミュニティはハッキングやオフラインでの脅迫被害など数多くの攻撃を受けていた。ヤング・フェミニストたちは、「パソコン通信上で軍加算点制の論争が起こった時の雰囲気からすれば、誰もがアクセス可能な公論の場に留まることはエネルギーが消耗されるだけと考え、すべての人に開かれた双方向的空間よりも、もっと企画された議論を提供し、フェミニズムに同意する人だけが集まったりするようなやり方で、以前とは異なるアプローチが必要だと思った」ことをきっかけに、ウェブマガジンや新聞の創刊、（会員制）オンラインコミュニティの活動に取り組んだ（권김현영ほか 2017）[1]。

このように、後発近代化を経た韓国の 1980 年代～ 2000 年代初期のフェミニズムは、大まかに民主化運動世代とヤング・フェミニスト世代によって主導されてきており、日本や欧米での第 2 波フェミニズム（性差別の是正、性役割や「女らしさ」からの解放など）と第 3 波フェミニズム（多様性やインターセクショナリティ（交差性））の内容が凝縮されていたといえる。

⑶ バックラッシュとポストフェミニズム

ジェンダー平等政策やフェミニズム運動が長い間重要な政治的議題として位置付け

[1] 公代表的なフェミニズム・ウェブマガジンとしては、dalara.jinbo.net（1998 年創刊、現在サイトのみ維持）や unninet.net（2000 年創刊、2023 年 10 月現在も運営中）があった。unninet.net の場合はウェブマガジンとして創刊し、会員制のコミュニティサイトとなった。また「女性主義ネット新聞」として 2004 年に創刊した ildaro.com は、現在もフェミニズム言論において重要な役割を果たしている。

られている欧米社会とは異なり、アジア通貨危機以後の労働市場の再編と再生産構造の急速な変化の中で、性平等政策やフェミニズム運動が同時に展開されてきた韓国社会では、フェミニズムへのバックラッシュ（採り戻し、反動）も若年層男性を中心に激しくあらわれた。

韓国で女性が本格的に労働市場に参入したのは、大企業が大卒女性を採用し始めた1990年代に入ってからである。しかし1997年にはアジア通貨危機を迎え、2000年代には新自由主義的体制の強化に伴い、雇用の流動化・不安定化が進む。このような背景のもと、雇用における女性差別を避けるための、一部の高学歴女性の職業選択であった司法試験、公務員、教師、医師など専門職（統一試験による選抜が行われ、女性差別が比較的少ないとされる職）における女性の増加は、「女性優位時代」や「女超社会」などとメディアにおいて過度に評価されてきた。「女性の活躍」の可視化は、「女性が男性の競争相手になりうる」という男性の危機感と不安を土台にし、2000年代にかけて「アルファガール」論など女性を牽制する言説へと拡大し、再生産された。

こうした1990年代末～2000年代の女性の高学歴化と社会進出の増加、アジア通貨危機以降の男性稼ぎ主モデルの揺らぎとともに、前述した軍加算点制の廃止や「女性家族部」という国家行政機関の新設[2]、2005年の戸主制廃止の決定などを背景に、2000年代初期からフェミニズムへのバックラッシュの動きは益々高まった[3]。性平等が国家的議題となる変化を「女性の特権」と認識する若年層男性たちによる「逆差別」論や「弱者男性」論の浮上とともに、アンチフェミニズムと結合した女性嫌悪的（ミソジニー）言説が拡散していった（京畿道家族女性研究院 2016）。

女性嫌悪的言説は「すでにジェンダー平等は達成された」という誤った認識に依拠している。そうした「フェミニズムはもはや不要」であるとするポストフェミニズム的風潮（McRobbie, A. 2009）は、「満足できない女性」への嫌悪を正当化する[4]。韓国においては、2000年代中盤に登場した「キムチ女（「理想が高そうな、いずれは経済力のある男性に依存して生きるであろう」女性の表象）」や「テンジャン女（「ブランド好きで見栄っ張り」な女性の表象）」などに代表される女性嫌悪的表現の日常的使用にあらわれる。

そういったポストフェミニズム的社会状況においては、構造的問題の解決やジェンダー不平等の是正に向けた連帯は弱まり、女性の個人主義的・能力主義的成功が称揚

---

[2] 2001年1月29日に「雇用労働部」の女性の住宅問題と、「保健福祉部」の家庭内暴力・性暴行被害者保護および性売買防止関連業務とを移管して「女性部」を新設した。2005年には「女性家族部」へ改編する。

[3] 戸主制は男性優先の戸主（1958年の韓国民法によって「一家の系統を継承した者」と規定）を中心に編成されてきた父系血統中心の身分登録システムだった。戸主制は2008年1月1日に廃止された。

[4] マクロビー（McRobbie 2009）は、ポストフェミニズムを反フェミニズム的感情によって特徴づけられる社会文化的状況と定義する。しかし単純にフェミニズムが否定されるのではなく、フェミニズム的要素は制度的・政治的生活に反映され、「選択」や「エンパワーメント」といった言葉がより個人主義的な言説へ転換され、大衆文化やメディアの中である種のフェミニズムの代替として展開されていると指摘した。菊地（2019）はポストフェミニズムの定義について「フェミニズムを終わった（ジェンダー平等はもう達成された）ものとして認識させ、フェミニズム的な価値観を周縁化し、それによってジェンダーとセクシュアリティの秩序を再編する社会的状況」である（菊地 2019:98）と論じた。

される。また第3波フェミニズム以降の多様性や「選択の自由」「女性性」を肯定する傾向と、新自由主義の進展および消費文化との結びつきによって、女らしさを「主体的」に体現することが追求されるようになる。韓国においても女性の身体的自己管理や性的魅力を磨くことが、女性の「エンパワーメント」や「主体的消費者」「成功した女性像」と結びつけられた。2000年代初期の韓国の美容整形やダイエットブームなどに代表されるルッキズム（lookism）の強化は、そういった風潮を背景に持ったといえる。

3．フェミニズムの新たな潮流とその戦略

⑴　ミラーリング運動と「フェミニズム・リブート」

以上のような新自由主義とポストフェミニズムの影響により、女性運動の停滞期はしばらく続く。しかし、2010年代中盤には、韓国のフェミニズム運動の流れに大きな変化をもたらしたいくつかの「事件」があった。

韓国の第4波フェミニズムの起爆剤となったのは、2015年の「ミラーリング運動」である。ミラーリング運動は、韓国最大のオンラインコミュニティサイトの一つであるDCインサイドの「MERSギャラリー」という掲示板から発生した。経緯は以下の通りである。当時マーズ（MERS、中東呼吸器症候群）が流行し始めた頃、感染の疑われる韓国女性2人が香港で隔離を拒否しているという報道に接した男性ユーザーたちは、「キムチ女のせいで韓国にMERSが広がる」という非難を加えた。その報道は香港当局の誤解による誤報だったことが明らかになる。感染者が男性か女性かによって非対称的な評価が下されることを目撃した女性たちは、性のダブルスタンダートとミソジニー（女性蔑視・女性嫌悪）に対して声を上げ始めた。

これをきっかけとし、日常的に蔓延るミソジニーに対する反発と怒りはミラーリング運動という形であらわれた。ミラーリングとは女性に向けられるミソジニー表現や差別的言動を、男性に「鏡に映す」よう投げ返す戦略である。すなわち、差別や嫌悪の対象を男性へ逆転させることで、差別的構造の暴力性や問題の深刻さに気づかせる戦略である。

こうした戦略は、形として男性に向けられているが、逆説的に男性よりも女性自身を覚醒させる効果があったと評価されている。ミラーリングは、女性に「覚醒」と「治癒」と「女性連帯」の力を与えた(김선희 2018:72-74)。ミラーリング運動の日常化と連帯の広がりは、女性たちがこれ以上畏縮せず、フェミニストであることを堂々と名乗ったり、女性嫌悪表現の否定的な言葉の意味を反転・転覆させたりするなど、多くの変化をもたらした。

このような運動の中心となった若年層女性たちは、不法撮影動画やリベンジポルノが共有されてきた不法ポルノサイトの廃止やデジタル性犯罪被害者の支援をも導く。

その後の2016年に起きた「江南駅女性殺害事件」は、より多くの女性たちのフェ

ミニズム運動への参入をもたらすきっかけとなった。江南駅殺人事件をめぐる女性たちの対応は、以下のような意味を持つ。一つ目は、女性たちが社会とマスコミに対抗し、「江南駅殺人事件は『無差別』事件ではなくフェミサイド（女性へのヘイトクライム、ミソジニー犯罪）」であることを主張したことで、ある事件をどのように規定し記述するかをめぐる言語的な政治闘争を試みたという点である。二つ目は、「被害者は自分だったかもしれない」という共感と連帯が、女性たちのフェミニズム実践に繋がり、それまでオンライン中心だった運動がオフラインに拡大するきっかけとなったという点である。例えば、2018 年には恵化駅デモ（不法撮影不公正捜査糾弾デモ）や堕胎罪廃止デモをはじめとして、大規模なオフラインデモが相次ぐ。その後、堕胎罪は 2019 年 4 月 11 日憲法違反の決定が下され、2021 年 1 月 1 日から人工妊娠中絶が非犯罪化されるという変化があった。これは韓国における第 4 波フェミニズム運動の大きな成果の一つである。

ミラーリング運動をはじめ、フェミニズムの言語が女性たちの自己経験に対する認識論の枠組みとして受け入れられながら大衆化した韓国の第 4 波フェミニズムをめぐる現象について、ソン・ヒジョン (손희정 2017) は「フェミニズム・リブート (feminism reboot)」と呼ぶ。こうした韓国の新しいフェミニズム政治学は、既存の女性政策や制度内では解決しきれなかった女性たちの生や日常に関わる問題がその議論と実践の中心になっているという特徴を持つ。その代表例として、以下では「脱コルセット」と「 4 非」志向について、その主要な論点と特徴を分析する。

⑵　脱コルセット：規範的女性性からの脱却

2017 ～ 2018 年には、10 ～ 20 代女性が中心となった「脱コルセット」運動が浮上した。「コルセット」は主に女性に求められる外見に対する圧力を比喩的に表現したものである。「脱コルセット」運動は、女性を抑圧する規範的女性性に抗う。

「コルセット」に関する議論自体は、（第 4 波フェミニズムに限って言えば）ミラーリング運動の時から女性オンラインコミュニティを中心に展開していた。例えば、チークを強調した化粧を男性キャラクターや男子アイドルに着せた「ミラーリング写真」を通じて、美容実践の不自然さに気づいたり、外見的コルセットを男性にはどこまで適用できるかという議論から男女の地位の非対称性に改めて気づくといったものである。

オンライン空間における脱コルセット運動は、単に脱コルセットの必要性やそれを支持する発言を掲示するだけでない。さらに、化粧品を捨て、髪を短く切った写真を SNS にアップロードし「＃脱コル」というハッシュタグをつけ、自身の経験を共有するというやり方で広まった。

「女性は美しくなければならない」という外見至上主義や規範的女性性は、長い間フェミニズムが闘ってきた問題の一つであった。2010 年代に入り、この問題が韓国の 10 ～ 20 代女性たちの新しいフェミニズム運動の主要なアジェンダになったのは、消費資本主義と美容産業の拡大、SNS や「一人メディア」の発達、そして上述した

新自由主義下のポストフェミニズム的な状況に支えられ、女性の美しさが階級や社会的成功の印に結びつけられてきた傾向がその背景にある。

現在の 30 代以上の世代にとって、中学・高校で化粧をするという行為は校則違反であり、逸脱的行為とされていた。これに対し、10 ～ 20 代の女性たちにとっては同年代の支配的文化として、ピアプレッシャーの強く作動する領域において、化粧を拒否することが逸脱なのである。脱コルセット運動が特に 10 ～ 20 代の女性に高い支持を得られた理由は、その規範的女性性が単に外見に限られた問題ではなく、学校や職場における男性との平等な競争を阻害するもの ── 競争において男性より多くの費用を負担し、条件をクリアしなければならない問題 ── として受け止められたためである（김애라 2019）。

脱コルセット運動は、「普遍的な人間は男性に想定されている」というフェミニズムの長年の問題意識を外見に適用した運動であり、女性に求められる「最低限の身なり」を男性と同様に追加労働の不必要な状態にしようという政治的意志のあらわれである（イ 2022）。さらに、女性個々人の経験においては、規範的女性性から脱することを通じて女性を性的対象化する視線から抜け出すとともに、異性愛規範を再考することにつながるという影響があったという（イ 2022；柳 2023）。女性を性的対象化する規範的女性性や異性愛規範から脱し、主体の立場からの視線を持つようになることで、人生におけるより幅広い可能性を考えられるようになったという経験が、脱コルセットを実践した女性たちに共通して語られている。

⑶　4 非志向：家父長制ボイコット

2019 年には、異性愛関係を全面的に拒否するという「 4 非（非婚•非出産•非恋愛•非セックス）」が登場した。「非」の韓国語読みが「ビ」であることから、「4B 運動」と称される。

2010 年代のフェミニズム的議論の活性化とともに、初期には「家父長制下では結婚•出産を拒否する」という若年層女性による非婚・非出産宣言が浮上した。その後、女性の性的対象化・性的モノ化とかかわる一連の事件（デート DV やリベンジポルノ問題など）が相次ぐにつれ、「非婚」と「非出産」に「非恋愛」と「非セックス」が加わり、「 4 非」運動が成立した。

2019 ～ 2020 年には、女性限定会員制の「非婚コミュニティ」が次々と立ち上げられた。非婚コミュニティの目的は、結婚制度に包摂されない女性たちが周辺化されやすい社会で持続可能な非婚ができるように、女性同士の情報交換や交流をはかるものである[5]。そのほとんどは「〇〇非婚女性コミュニティ」という名称であるものの、

[5] 代表的なものとしては、非婚女性経済コミュニティ「COW」や非婚女性コネクションコミュニティ「emif」の他に、地域別には慶尚道非婚女性共同体「WITH（Wolves In The Hell）」、全羅道非婚女性コミュニティ「ViSion」、光州・全羅道地域の「B(E)COMETRUE」、天安牙山地域の「ビヘンソン（飛行船）」、大田地域の「ビホンフゲム」などがある。会員の年齢層は目的によって 10 ～ 20 代が中心であるものもあれば、経済活動をしている 20 ～ 30 代が中心である場合もある。活動のプラットフォームはそれぞれだが、そのほとんどが（会員の募集期間や募集方法の告知以外は）外部者に非公開の形で運営されている。ま

暗黙的に「4B」を志向すると理解されており、その中でも 10 ～ 20 代が中心層となっている「非婚女性共同体 WITH」は、「（男性との間で）4B を実践する」ことを明示的に掲げている。

「4 非」の価値観を形成した 20 代女性の経験に関するインタビューを行った研究（강미선ほか 2020）によると、若年層女性たちにとって「4 非」とは「家父長制に対抗する最も根本的で個人的な運動」であり、「クリーンな生き方」「自分らしく生きること」「女の人生における不純物を取り除くこと」であると表現されている。4 非志向の形成過程には、2010 年代フェミニズム運動の活性化や構造的ジェンダー不平等の認知、様々な女性運動への参加など、実践的な経験のあったことが明らかになっている。

婚姻制度の差別性への抵抗や、家父長制を再生産しないための選択として「非婚」になることはそれほど珍しいことではない。だが、「非恋愛」と「非セックス」が加わったことは、すなわち異性愛関係を全面拒否するという現象は、従来のものとは区別される。

4 非志向の女性たちは、ジェンダー非対称的な構造の中では、対等な関係性の構築や性的自由などの価値を異性愛関係に期待できないと考える。同時に、現状では婚姻制度だけでなく恋愛もまた家父長制の維持につながるとさえ認識している。さらに、彼女たちは異性愛規範に批判的であるだけでなく、性愛規範自体を自明視しないという特徴を持っていることも指摘されている（柳 2023）。

4 非は女性の生や日常が男性を介して意味化される家父長制社会において、女性が「個人」であろうとし、（性愛関係を通じて）「男性」に属さずとも対等な人格を持った個人として尊重されることを求める運動である。すなわち、女性に割り当てられてきた地位（家父長制における女という階級）を拒否し、女性の「生き方のデフォルト値」を変えようとする運動なのだといえる。

4. 韓国における第 4 波フェミニズムの論点と新しい運動主体

以上のように、デジタルネイティブ世代によって主導され、ミラーリング運動というオンライン中心の運動から拡散した韓国の第 4 波フェミニズム運動は、オフラインの市民運動へも拡大した。またそこには「脱コルセット」や「4 非」のように、自身の身体や生を通じて実践するという「私的領域の政治化」が活発に行われるという特徴がある。

彼女たちは、フェミニズムの大衆化をもたらし、「ネットフェミ」と呼ばれるという点で、旧世代のヤング・フェミニストとの類似性が韓国では注目されがちである。

た会員になるためには、特定の条件 ── 独身女性であることの証明など ── を満たしつつ、求められる課題をクリアする必要がある場合がほとんどである。

だが、両者の置かれていた社会的文脈やスタンスの違いは顕著である。以前の世代のフェミニストたちは、フェミニズムを一つの進歩的思想として受け入れ、大学の女性学を通じてフェミニズムを学び、理論と知識を身につけていた専門家と活動家であった。これに対し、現在の若年層女性たちはフェミニズムを「生存技術」として、つまり日常における性暴力や女性嫌悪に対抗する戦略として受け入れ、様々な問題と日常的に直接闘っているという特徴がある（金 2022:74-75）。そうした特徴は「脱コルセット」や「4非」のような私的領域の政治化につながる。またヤング・フェミニストたちは差異の政治を本格的に提起していたのに対し、新しい女性運動は（必ずしも運動主体の性格は単一的ではないものの）、上述した一連の過程や主要な運動に見るように、男性優位な権力構造に基づく「女性共通」の問題に改めて焦点を当てるという特徴がある。

これらの特徴は、現在の若者たちが新自由主義的な秩序に適応しながらも、同時に新自由主義的状況がジェンダー秩序に及ぼしてきた影響に対して自覚的で批判的であるという背景に求めうる。

韓国の第4波フェミニズムの中心的な運動主体である若年層女性たちは、女性の大学進学率が男性を上回る時代を子ども期から経験し、ジェンダー平等な教育環境で育った世代であると同時に、1997年アジア通貨危機以降の新自由主義体制の強化の中で成長期を過ごした世代である。自己啓発の主体、消費主体、労働主体として、能力主義や成果主義、無限競争の原理は彼女たちにとって当然のものとなっている。

女性の存在を性役割にだけ還元していた過去とは違って、新自由主義は生存手段の一つとして女性の「個人化」を許容した。それぞれが自分自身の生き方を模索しなければならないという新自由主義の生存原理において、家父長制は妨害要因になるのである（鄭 2021:81）。その時、若年層女性たちにとってフェミニズムの言語は「合理的」なものとなる。鄭（2021:81）はこうした女性の個人化が、新しい運動主体によるフェミニズムの大衆化の基盤であり、「新自由主義が家父長制に少しの間勝利した」と表現している。

例えば、女性の化粧や着飾り労働は、男性よりも多くの費用と時間の消費を女性に課すことから、女性の成功の機会を妨げるもの、すなわち新自由主義的な合理性を阻害するものと理解される。そのため、脱コルセット運動は自己啓発や効率的な消費などという新自由主義と消費資本主義の枠組みの中で機能していると指摘されている（김애라 2019）。そうした観点から、恋愛・結婚・出産といった親密性の領域も若年層にとっては「コスパの悪いもの」として捉えられる側面がある。そして、このような文脈から、4B（非婚・非出産・非恋愛・非セックス）というラディカル・フェミニズムの政治戦略は、（恋愛や結婚などに価値を置かず）女性個々人の成功を重視するなど新自由主義との親和性が高いと解釈されている（조주현 2020）。

しかし、今や新自由主義の影響から離れた自由な社会的領域や主体はほとんど皆無である。そのため、女性運動の新しい変化を正しく理解するためには、必ずしも新自由主義に還元できると限らない側面にも注目することや、既存の新自由主義的フェミ

ニズムやポストフェミニズム的状況との関係や違いにも注目することが必要になろう。

ヤング・フェミニストの登場以降である 1990 年代末～ 2000 年代の大衆的フェミニズムはその後、新自由主義の影響により、第 2 節で述べたポストフェミニズム的状況に入れ替わった。韓国における第 4 波フェミニズム運動は、そういった流れに対する反動でもあるという点を看過してはならず、新自由主義的なフェミニズムとは区別する必要がある。

例えば、4 非運動はフェミニズム実践の経験を通じた女性同士の連帯と「女性中心」化の試みである（강미선ほか 2020；이현재 2019）。また 4 非を含む若年層女性たちが形成した第 4 波フェミニズムは、前述のような新自由主義的合理性を追求しつつも、不平等の再生産構造の解体を志向し、女性同士の連帯とケアを試み、その制度化を要求するなど、女性個々人のウェルビーイングに留まらない新しいフェミニズム政治化を示唆する（이현재 2019）。脱コルセットと 4 非志向の女性たちの多くは、新自由主義的能力主義や「各自が生きる道を図る」といった感覚を持ちながらも、お互いのエンパワーメントやセーフティネットとしての存在となって連帯しているのである。また彼女たちはそれまでのジェンダー化された消費文化や非対称的なジェンダー構造を覆い隠してきた既存のネオリベラルな言説やポストフェミニズム的状況に対して、自覚的であり批判的であるということも指摘されている（柳 2023）。

こうした点から、韓国の第 4 波フェミニズムの言説や現象は、単なる「新自由主義への迎合」ではないことがうかがえる。すなわち、韓国の若年層女性のフェミニズム実践に対して提起された新自由主義的背景による解釈と批判には、その複雑性に関して、さらに多くの実証的研究を通じた再検討が求められる。

本稿では、韓国におけるフェミニズム運動の系譜とその展開を分析することによって、韓国の第 4 波フェミニズムの主要な運動の戦略がどのような文脈と政治性を持っているかについて明らかにした。

デジタルネイティブ世代を中心に連帯を広げた韓国の第 4 波のフェミニストたちは、主にオンライン中心のコミュニティを通じて繋がっているという点では、一見すると緩いつながりであるように見える。だが、急進的な立場をとるという特徴や、旧世代との断絶、世代間認識の差などと絡み合い、どの時代のフェミニズム運動主体よりも、実は強い連帯を形成している。第 4 波フェミニズム運動はまだ進行中である。新しい政治主体として浮上した若年層フェミニストたちが、これからどのような女性連帯を作り上げていくのか、また他の世代や他の権利拡張運動とはどのような関係を結んでいくのか。引きつづき注目される。

本稿は、常葉大学個人研究費（令和 5 年度）と JSPS 科研費 JP20K22162 の助成を受けた研究成果の一部である。

参考文献

McRobbie, A. 2009. *The Aftermath of Feminism: Gender, Culture and Social Change*, SAGE

イ・ミンギョン 2022『脱コルセット』タバブックス .

菊地夏野 2019『日本のポストフェミニズム:「女子力」とネオリベラリズム』大月書店 .

金美珍 2022「韓国：フェミニズムの大衆化と新たな挑戦」熱田敬子、金美珍、梁・永山聡子、張瑋容、曹曉彤（編）『ハッシュタグだけじゃ始まらない:東アジアのフェミニズム・ムーブメント』大月書店 , 49-80.

鄭喜鎭（編）2021『#MeToo の政治学：コリア・フェミニズムの最前線』大月書店

柳采延 2023「韓国の第 4 波フェミニズムにおける「4 非」志向の考察：6 人の女性のインタビューから」『日韓国際学術学研究』1:75-98.

강미선 , 김성희 , 정인혜 2020「내 뜻대로 삶 쓰기 : 20 대 여성의 4B 가치관 형성 과정 연구」『여성학논집』37(1)153-194.

김선희 2018『혐오미러링』연암서가 .

김애라 2019「‘탈코르셋’, 겟레디위드미 (#getreadywithme) : 디지털경제의 대중화된 페미니즘」『한국여성학』35(3)：43-78.

권김현영 , 박은하 , 손희정 , 이민경 2017『대한민국 넷페미史』나무연필

손희정 2017『페미니즘 리부트 (혐오의 시대를 뚫고 나온 목소리들)』나무연필 .

오김숙이 2010「한국 여성운동과 차이 문제」『여 / 성이론』22:106-129.

이현재 2019「신자유주의 시대 젠더정의와‘유리천장 깨뜨리기’: 변혁적 논의를 위한 비판 페미니즘 제안」『젠더와 문화』12(2)：43-73.

정연보 2015「영페미니스트와 여성의 재구성 웹진 달나라딸세포를 통해 본 정체성 , 차이 , 재현에 대한 고민들」한국여성학 31(3):31-64.

조주현 1996「여성 정체성의 정치학」『한국여성학』12(1):138-179.

조주현 2020「청년여성운동과 정치전략」『아시아 여성연구』59(3):77-111.

경기도가족여성연구원・경기여성네트워크（京畿道家族女性研究院・京畿女性ネットワーク）2016「(政策討論会 2016) 여성혐오에서 여성폭력으로」